

「成功体験」と「応援」の積み重ねがつくる、 チャレンジしたくなる地域

ローカルSDGs構築セミナー 第3回講演編 開催レポート

[地域循環共生圏づくりプラットフォーム構築事業](#)では、地域の環境・経済・社会を元気にしたいと考える人たちが、一步を踏み出す「きっかけ」や「学び」を得るためのセミナー「ローカルSDGs構築セミナー」を開催しています。

第3回講演編では、一般社団法人ねばのもり 杉山さんをお招きし、『地域の活動を着実に前に進める！プロジェクトの立ち上げ方』をテーマにお話しいただきました。

その内容をレポートします。

杉山 泰彦(すぎやま やすひこ)さんプロフィール

2017年より、地方と都会の繋がりを支援する株式会社WHEREに参画。「地域から新しいライフスタイルの選択肢を見つける」をモットーに、地域PR・移住定住サポート事業で20地域の案件実施を担当。

「自分自身が、もっと生きる力を身に付けたい」と考え、2018年12月に東京から長野県根羽村に夫婦で移住。2019年4月-22年3月まで「根羽村PR戦略担当」を務め、任期中に2年連続社会増・関係人口創出を推進。20年8月より社団法人を立ち上げ、持続する村づくりを行っている。

杉山:根羽村は、プロジェクトがたくさん立ち上がる地域です。

今日は、根羽村の具体的な事例を取り上げながら、地域におけるプロジェクトの立ち上げについてお話しできればと思います。

はじめに、根羽村について簡単にご紹介をさせてください。

根羽村は、長野県の最南西端にある村で、矢作川という川の源流にあたる場所にあります。面積の9割が森林の村で、林業が盛んです。川の源流があるということもあり、「森を通じて水を守る」という考え方が定着しています。人口は865人・430世帯の村です。

どこの山村でも起きていることですが、根羽村も「高齢化と人口減少」という壁にぶつかっています。人口の半分以上が高齢者という、厳しい状況です。

そんな状況の中、この5～6年でUターン者を含む移住者が増えており、賑やかになってきました。

2020年度に平成以降初めて社会増(転入と転出の差がプラスになること)を実現できました。1年間の移住者は19世帯46名。山村留学や地域おこし協力隊の受け入れ、地域活性化人材の利活用など、様々なことを行っています。

数字でみる 2020年度の 根羽村の成果

19世帯 46名

移住者数(トライアル移住者含む)

- 20年度より始まったトライアルハウスが移住促進施策となった
- 村としては平成以降初となる社会増となる見込みとなった

6世帯(2021年度予定)

山村留学世帯数

- 2019年度よりスタートした制度
- 20年度はSNSを積極活用
- 昨年度より5倍の申込となった

40記事

根羽村の活動の取材掲載数

- 新聞に年間35記事掲載
- WEBメディアにも5記事掲載
- 多くが教育にまつわる記事
- オンライン活用も注目された

県外17団体
県内4団体

村づくりに関わる事業者数

- 企業との関係人口作りを推進
- 流域沿いの企業・自治体との連携も
- 観光・介護・ものづくりなど幅広いジャンルでの連携が行われた

新規5名

地域おこし協力隊活動人数

- 農業、林業でそれぞれ20年度4月より活動
- 映像を活用したPR担当が20年度6月より活動
- 教育、観光に1名ずつ
21年度新規活動予定

4社

地域活性化企業人導入数

- 教育魅力化、ICT推進で1名
- 村全体のSDGs施策推進で1名
- 観光事業の新規立ち上げで1名
- 水の布プロジェクト推進で1名

今年度は、総務省さんの持続的発展優良事例の総務大臣賞の認定を受けました。

参考:令和4年度の過疎地域持続的発展優良事例表彰における総務大臣賞https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/2001/kaso/kasomain7.htm

また、15歳から29歳における女性の割合が、2020年に全国で1位だったようです。

参考:日本経済新聞ふるさとクリック地図で見る15~29歳の女性割合<https://vdata.nikkei.com/newsgraphics/regional-regeneration/young-women-rate-map/>

このような形で、徐々に賑やかになってきている村です。

地域の中にある個性や資源を起点にコンテンツや事業をつくる

ここからは、なぜ根羽村で多くのプロジェクトが立ち上がっているのかについてお伝えしていきます。

はじめに結論をお伝えすると、私は『その人がまたその活動をしたくなる「成功体験」や「応援」を感じられる機会や場をつくること』が、地域で多くのプロジェクトが立ち上がるにあたって大切なことだと思っています。

根羽村は、環境省さんの地域循環共生圏づくりプラットフォーム事業に3年前から参加しています。事業の一環で村の若い人たちを集めてワークショップを開催した時に言語化した想いは、「30代~40代の村内在住者がこの地域で今後も楽しく生き続けられる環境をつくる」ということでした。

地域コミュニティを活性化するために、様々なステークホルダーを取りまとめる役割が必要なのですが、当時根羽村の中ではそれを担う人がいませんでした。コミュニティビジネスで言うところの「コーディネーター」という役割に該当する存在です。

その状況を変えるために、一般社団法人ねばのもりは立ち上がりました。『いつまでも居たい森を、共に描こう』ということ掲げており、何かやりたいという想いを持っている人たちを支援するプラットフォームになることを目指して活動しています。

私は、自分自身がプロジェクトの主体プレイヤーとして活動をするわけではありません。その上で、自分が担っている役割を言語化すると、『紡ぐ』『企む』『繋ぐ』の3つが役割です。

村にある個性や資源を紡いで、それらを繋ぎ合わせた企画を企み、繋ぎ合わせて事業として持続させていくことで、「ねばむらごこち」の良い文化を根羽村に根付かせていきたいと考えています。「ねばむらごこち」とは、村のみんなが「根羽村いいな」と思っている空気や雰囲気のことを指しています。

担う役割

紡ぐ・企む・繋ぐ

村にある個性や資源を紡ぎ、
それらを繋ぎあわせた企画を企み、
繋ぎ合わせて事業として持続させていくことで
「ねばむらごこち」の良い文化を根羽村に根付かせつづける
(コミュニティビジネスにおけるコーディネーター)

活動をプロセスで見えていくと、「《点》づくり→《線》づくり→《面》づくり」の3段階になります。

達成に向けての道筋



これらのフェーズにおいて発生したものを随時村内&村外にPR

地域を生かした事業・コンテンツづくりをしていきたいと考えた時に、大切なことは地域の中にある個性や資源などの《点》から始めるということです。

いわゆるコンサル的に「こういう事業を地域でつくった方が良い」と、《面》づくりからスタートをするというやり方もあります。ただ、その時に、地域の中にある《点》や《線》が含まれていない《面》を作ってしまうと、それは地域にとって誇りになるもの・持続するものになりません。

《点》を掘り起こし、それらを繋ぎ合わせて、まず《線》の事業を作り上げていき、《線》を重ねて《面》にしていきます。時間はかかりますが、一步一步、丁寧なプロセスで作ることで、「手触り感」を感じられることが大事だと思っています。

《点》として存在している個性ある人は、どの地域にもいると思いますが、《点》で存在していることは、結構孤独だったりするんですよね。そういう《点》を、《線》や《面》に巻き込んでいくことで、自分が地域の中で大きな1つの役割を担っているという感覚を持てると思うんです。そうすることで、その人が「またこの活動をやろう」とか「もっと頑張ろう」と思えるようになると思っています。

地域内稼働率と委託率を高めていくことを目指す

僕が根羽村に来てから、約4年が経ちました。最初の1～2年は《点》づくりにフォーカスし、直近の2年間は《線》づくりにフォーカスしてきました。

これからは、これまで作ってきた《点》と《線》を生かした《面》をつくっていくことが求められていると思っています。つまり、大きいお金が生まれる事業を作りたいと思っています。

《面》を作っていくための方法として、官民連携による委託事業があります。村の役場だったり、国の事業からお金を引っ張ってきて、コーディネート組織として各事業者さんやプレイヤーさんに振っていきます。

あるいは、自社で自主事業を作り、それを振り分けていくというやり方もあります。

その上で、指標として大切にしていきたいのは「地域内稼働率」と「委託率」です。例えば、総額100万円の事業があったとして、100万円のうちのいくらかを村の事業者さんやプレイヤーさんに委託することができるのかはポイントになると思っています。

もちろん、地域内に委託することを優先して、コンテンツ参加者や消費者が満足していなければ意味がないので、それとバランスを取る必要はあると思っています。

また、事業を行いながら村の人たちの新しい挑戦の場をつくることを意識的に行っています。新しいコンテンツを開発したり、トライアルする場を増やしていくことが、地域で活動する人を増やし続けるために大切です。

具体的な事業の一つとして、「放課後子ども教室」があります。村からの委託事業として学童の運営を請け負っています。この学童も、コンテンツの創出の場であると捉えています。そのため、村の子どもたちを対象に、何か新しいチャレンジをしたい村民の人たちのトライアル場としても機能させています。

事業1:子供向け事業（放課後子ども教室事業）



また、私たちは「コミュニティースペース・くりや」の運営も行っていますが、こうした場でも、トライアルができることを大切にしています。

例えば「食をテーマに何か挑戦しよう」と思っている地元のお母さんが、持っている技術を使って、簡単なワークショップができたり、稼げるような場にしています。

事業2：施設運営事業（コミュニティスペース・くりや）



「成功体験」や「応援」を感じられる機会や場をつくることで、多くのプロジェクトが立ち上がる地域をつくる

冒頭にお伝えしたように、地域でたくさんのプロジェクトが生まれるためには、『その人がまたその活動をしたくなる「成功体験」や「応援」を感じられる機会や場をつくること』が最も大切だと思っています。

自分たちが地域の円滑剤として存在することで、チャレンジをしたいと考える人が全てひとりでやる必要がなくなります。チャレンジのハードルを良い意味で下げることで、地域で挑戦をする人が増えていく、そんな循環をつくっていきたいです。

一昨日、根羽村で新しいパン屋さんオープンしました。村に7～8年住んでいる人が、オープンしたもので、みんなが待ち侘びていたオープンでした。「パン屋が村にあるってこんなゆたかなのか！」と、いま村ではパンブームが起きています。

こうした村の雰囲気だったり、横での繋がりがあること、「ここだったら、チャレンジして応援されそう」と感じる人が増え、それによってまたチャレンジが増えていくと思っています。

=====

「ローカルSDGs構築セミナー」をはじめとする、地域循環共生圏に関する情報を、メールマガジンで配信しています。ご関心のある方は、ぜひこちらからご登録ください。

【連絡先】メールマガジン事務局（いであ株式会社内）

mail@chiikijunkan.jp